Do it

DO-IT Japan 2009 Report

障害のある高校生のための大学・社会体験プログラム

Disabilities,Opportunities,
Internetworking,and Technology
Japan

DO-IT Japanに関するお問い合わせはこちらまで　http://doit-japan.org/

発行元／DO-IT Japan 事務局

DO-IT Japan

自らを語り始めたスカラーたち

今年度DO-IT Japanは3年目を迎え、新たに大学生スカラー向けのプログラムが登場した。
彼らは今回のプログラムの中で協力企業を訪ね、また一般公開セッションや保護者向けのセッション（Living Library）にて、自らの障害について語った。そこには、大学進学をテーマに、これまで自らの障害をはじめ、合理的配慮、支援技術、コミュニケーションについて考えてきた彼らが、受験を経て次のステップに進んだ時、周囲の人々や後に続く後輩達のことを思い、社会において自らが果たすことのできる役割を見つけ行動を開始した姿があった。

DO-ITは、彼らのメッセージを社会に向け発信できる場を今後も提供していきたいと考えている。
例えば、従来個人的な問題と捉えられてきた受験の問題について、その特別措置の情報を集め、公に発信することが社会を動かす力へと結びつく。その力は、単に大学だけでなく、支援制度や指針を定める政府機関での議論を生み、それがひいては教育全体へと、つまり小中高における望ましい支援・配慮へと発展していく可能性を秘めている。
また、障害のある彼らのテクノロジー利用の実例や工夫に関する情報は、企業の技術開発を支援できる。
開発された技術は、教育場面だけでなく、働く場のバリアフリー化にも貢献し、将来の彼ら自身にも恩恵をもたらすであろう。

こうした社会の中での好ましい循環をDO-ITの枠を越え生み出す。それがDO-ITの目標であり、その兆しを今年、大学生スカラーたちの語りの中に感じた。

東京大学先端科学技術研究センター 准教授
DO-IT Japanディレクター
巖淵　守

Contents

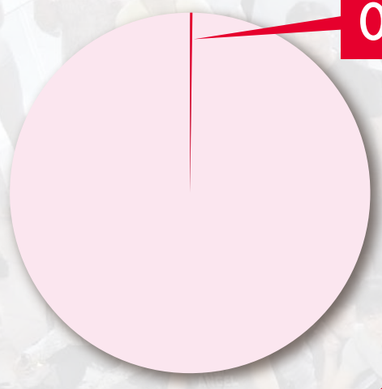
2 DO-IT とは
4 日程表
5 障害のある高校生のための大学体験プログラム
8 2009年度スカラー「DO-IT Japanに参加して 」
17 2008年度スカラー 育成プログラム「社会で発信できる人を目指して」
22 大学生スカラーとしてのDO-IT
24 一般公開セッション
26 DO-ITスカラーを支えるテクノロジー
28 主催・共催・協力・後援

主催：DO-IT Japan、東京大学先端科学技術研究センター
共催：マイクロソフト株式会社
協力：沖電気工業株式会社
オリンパスイメージング株式会社
株式会社京王プラザホテル
ケージーエス株式会社
株式会社資生堂
ソフトバンクモバイル株式会社
株式会社トヨタレンタリース東京
富士通株式会社
株式会社マガジンハウス　※五十音順
後援：厚生労働省、文部科学省

DO-IT？

日本にどれくらい
障害のある
学生がいるか
ご存知ですか?

日本における
学生全体に占める
障害のある学生の比率



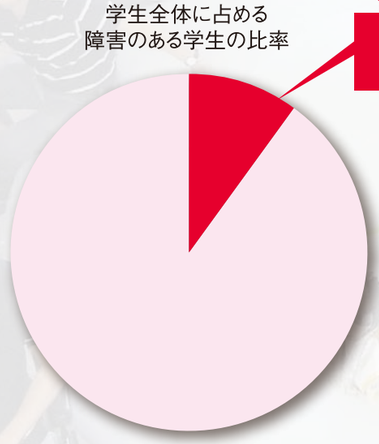
[出典]日本学生支援機構(2009)

実はこんなに
少ないんです

障害のあるひとたちの
進学状況について、
日本は大きく
遅れています

例えば
アメリカでは
どうでしょう?

アメリカにおける
学生全体に占める
障害のある学生の比率



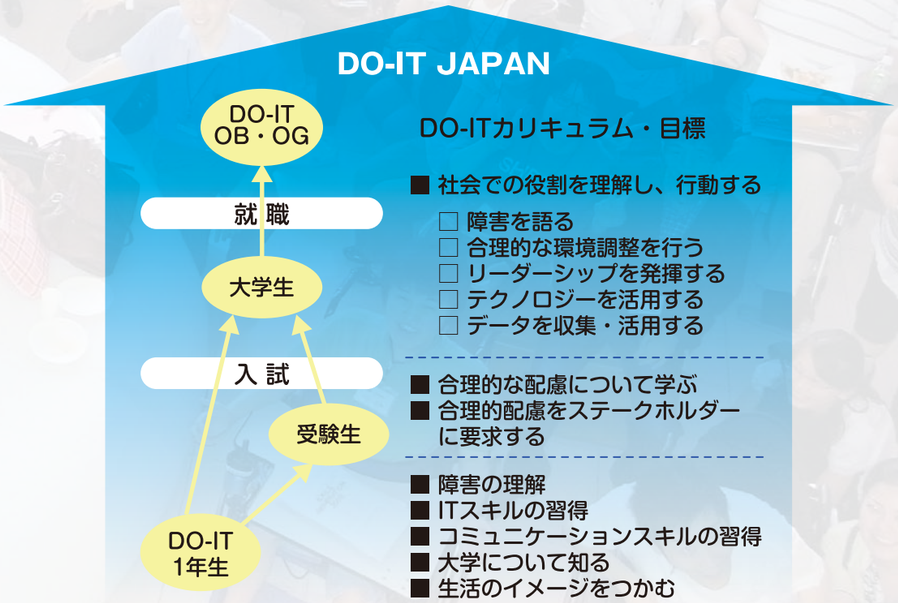
[出典]ES 国立教育統計センター(2005)

DO-IT Japanは日本において
障害のある高校生や高卒者を支援するプログラムです

Disabilities(障害)
Opportunities(機会)
Internetworking(インターネット活用)
Technology(テクノロジー)
それぞれの頭文字をとって**DO-IT**

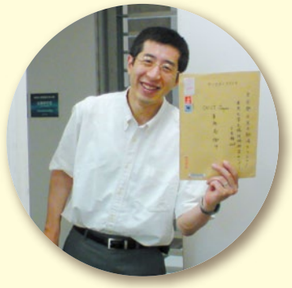
DO-IT Japanの目標

年間を通じたプログラムによって次世代の社会を担う人材を育成



Process

April
募集
パンフレットと応募要領の配布、Webからのダウンロード
参加希望者は応募書類・推薦書・同意書を作成



May
応募
5月18日から6月5日まで

June
審査
応募書類に基づき、審査委員会によって参加候補者を選考

June
スカラーへのヒアリング審査
生活の様子、勉強、コンピュータの利用、障害のことなどについて
事前にヒアリングし、参加者を最終決定

June
合格発表
審査に基づき9名のスカラーを選出

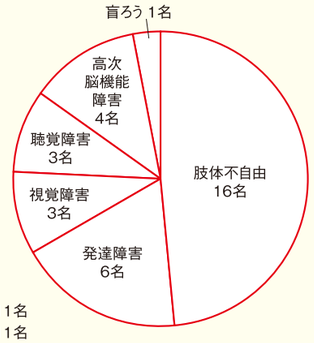
July
大学体験プログラム
5日間親元を離れ、企業での実際の就労状況の見学、大学の体験、
テクノロジー利用法の学習、障害のある当事者同士のコミュニケーションなどを学ぶ

August
オンラインメンタリング開始
スカラーは無償で貸し出されたコンピューターを通じて、今後ともDO-IT Japanと連絡を取り合う。
これによって学業や将来の就職に関する情報を交換し、自らの成長につなげてゆく

to be continued...

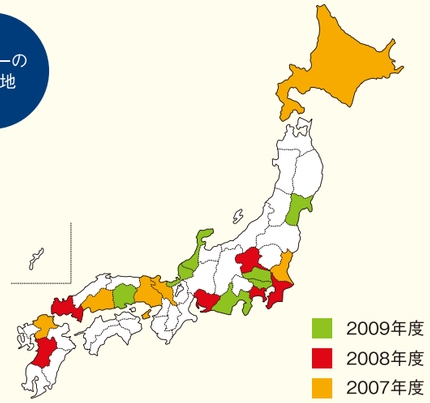
DO-ITJapan スカラー データ

スカラーの障害内訳



●2007年度スカラー　11名
●2008年度スカラー　11名
●2009年度スカラー　 9名

スカラーの出身地



DO-IT Japan 実績データ

DO-IT 大学進学率

	スカラー数	合格者数
2007年度	11	6
2008年度	11	4
2009年度	9	0

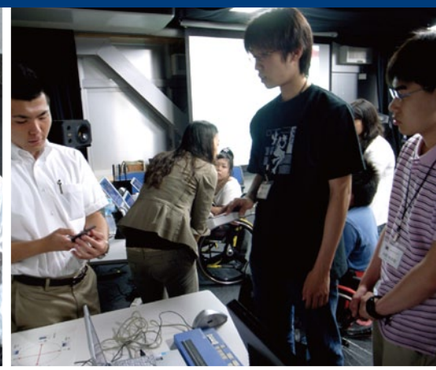
※スカラー数には高校在学中の者が含まれます

2009年度のメディア掲載

●月刊実践障害児教育（2009年6月号）
●日本教育新聞（2009.8.17）
●インターネットニュース（全て2009.7.30）
　Enterprise watch
　Internet Watch
　IT Pro
　日経PC online
　PC watch
●COURRiER Japon（2009.10月号）
●JR東日本 山手線モニター動画（2009.10～）

DO-IT Japan 2009（夏季体験プログラム） 2009/7/29-8/2

―― 悩みを共有したり、相談する友達ができました ――



Schedule

DO-IT Japan 2009 夏季プログラム スケジュール

		9:00〜10:00	10:00〜11:00	11:00〜12:00	12:00〜13:00	13:00〜14:00	14:00〜15:00	15:00〜16:00	16:00〜17:00	夜
7.29 Wed	09 スカラー					受付	**ガイダンス** 「社会におけるDO-ITの役割とは」 中邑賢龍 教授 (東大先端研3号館M2)	**レセプション** スピーチ:濱田純一(東京大学総長) 大井川和彦(マイクロソフト株式会社 執行役常務) 司会:宮野健次郎(東京大学先端研 所長)	ホテルに戻る	18:30 20:00 アイスブレイク
7.30 Thu	09 スカラー		Microsoft社 訪問					16:10	ホテルに戻る	19:00 20:30 懇親会
7.31 Fri	09 スカラー		朝の会 9:40 ようこそトップランナーたちのラボラトリーへ! 伊福部研究室見学	休憩	「宇宙から三次元地図を作る」 岩崎晃 教授 (東大先端研3号館M2)	昼食	「金融危機はどうして起きるのか」 武藤敏郎 客員教授 (東大先端研3号館M2)	自由行動、夕食、ホテルに戻る		
	08 スカラー	オリエンテーション	移動	株式会社資生堂		移動	株式会社マガジンハウス	移動	17:00 ソフトバンクモバイル株式会社	19:00 21:30 ディナー
	大学生 スカラー							富士通ネットコミュニティ		
8.1 Sat	09・08 スカラー		朝の会 9:40 学生が実践する社会への還元 BAP(東大サークル) (東大先端研3号館M2)	10:40 休憩	「一人で暮らす」 奥山俊博(日本バリアフリー協会副代表) 大河内直之 特任研究員 (東大先端研3号館M2)	昼食	16:10 **〈一般公開セッション〉**(東大先端研4号館2階講堂) 大学進学に不安を抱える子どもたち・親御さんたちのために 〜努力だけでなく周囲に求めていく必要のある配慮〜 長澤慶幸(同志社大学生支援センター)・吉永崇史(富山大学 学生支援センター)・荒木昌美(日本学生支援機構)・DO-ITスカラー・近藤武夫 特任助教・コメンテーター/渡辺崇史(日本福祉大学准教授)・奥山俊博(日本バリアフリー協会副代表)	移動 休憩	16:30 18:00 交流会 (一般参加) (3号館M2)	夜の会
	大学生 スカラー		朝の会 「障害を理解する」 中邑賢龍 教授 (東大先端研3号館207)				14:50 「プレゼンテーションを学ぶ」 中邑賢龍 教授 (東大先端研3号館207)			
8.2 Sun	09・08 スカラー				10:30 朝の会	10:50 11:50 **講義** 福島智 教授 (東大先端研4号館2階講堂)	休憩	12:20 クロージングセレモニー (4号館2階講堂)		
	大学生 スカラー			9:15 朝の会	9:30 10:45 **Living Library** 大学生が親に障害を語る (東大先端研311)					

この「DO-IT Japan」により、悩みを共有したり、相談する友達ができました。

内山 涼

DO-IT Japanに参加させていただき、私は、貴重な体験をすることができました。このプログラムによって、私は自分の障害について見つめることができました。また様々な障害があることを学ぶことができました。私は普通学校に通っているので、障害を持った人たちと接する機会は皆無に等しいです。なので、私は様々な障害があるというのは知っていましたが、それぞれの障害に対する知識がありませんでした。いろんな障害を持っている皆と接していくうちに、みんなそれぞれ悩みとか不安があることを知りました。共感できる部分もあったり、障害に対しての考え方も様々であることも知ることができました。私は聴覚障害で、聞き取りが困難で、情報を得るのが難しく、期間中、大変でしたが、みなさんのサポートのおかげで、何事もなく過ごせました。普段、私は聞こえなかったらそのままにしてしまうことが多く、自分で損していることがありました。でも、それは、自分にとって良くないんだと教えられ、聞こえなかったらもう一回聞くなど、するべきだと考えるようになりました。またみんなに遠慮なく頼んでいいんだと思いました。

期間中、様々な講義があり、大学進学に関することを勉強することができました。センター試験での措置や、大学での措置をどうやって依頼するか、大学生活における不便を取り除くにはどうすればいいかなど、学ぶことができ、自分にとってしてほしいことを考え、それを大学に働きかけることが大事だということに気付きました。また、大学生たちの話を聞いて、みんな楽しいと言ってたので、さらに大学へ行きたいという気持ちが高まりました。でもやはり、障害があるから、色々不安はあります。そういう場合はみんなに相談しようと思いました。このDO-IT Japanにより、悩みを共有したり、相談する友達ができました。「DO-IT Japan2009」は終わりました。でもこれからも、メーリスやブログなどで、つながっているんだと心強い気持ちになりました。本当に参加することができ、とてもよかったです。

～家族から～

内山 由美

DO-IT Japanに参加させていただきありがとうございました。様々な障害を持った方と出会い、今回ほど「障害」という言葉に違和感を覚えた事はありませんでした。

以前、息子がムッとしたような哀しい顔で言いました。

「〝障害〟って邪魔っていう意味だよね?!」

障害者に対して健常者という言葉がありますが、何をもって〝健常者〟なのか…。

物忘れをしたり、手先が不器用だったり、歌が下手だったり、人に意地悪をしたり…。そんな事も大きい意味では障害のひとつひとつじゃないのかなぁって思います。

得意な事・苦手な事・優れている事・できない事、どんな人にでも両方あると思います。

金子みすずが詩った「みんなちがって、みんないい」という言葉が、参加期間中ずっと私の心にこだましていました。

プログラムが終わって息子は、「すごく楽しくて、気が楽だった。でもDO-ITは特別だからな…」と淋しそうに言いました。

参加したスカラーは障害を持っているという同じ立場で、先生方を始めサポートしていただいた方は特別理解がある方々で、家に帰れば夢から覚めたように辛い日々…と思ったのかもしれません。親としては、DO-ITのような場所が特別な場所ではなく、ごく普通の世界になって欲しいと願って止みません。これからもよろしくお願いいたします。

～家族から～

大町 郁子

小学2年生でADHDと診断された息子が高校生になったのを機会に、自己理解・自己受容ができることを願いつつ、仙台市の発達相談支援センターの職員の方の協力のもと、自分で支援をお願いする形にチェンジしたつもりだったのですが、うまく行かず、高校も休みがちで落ち込んでいたときに、実践障害児教育の募集案内に出会い、参加することができました。

出発日前日まで、体調管理ができずに点滴を受けての参加に心配しておりましたが、4日目に東大で会った息子は生き生きとメンバーと語り合っていて、心からわかりあえる先輩方のアドバイスに興奮している状態ではありましたが、これでようやく、自己受容・理解への一歩を踏み出せたのだと感じました。

まだまだ自分に必要な支援がどういうことであるのか、自分が何ができて、どこまでならやれて、どこから援助や指導をしてもらうのかさえ、はっきりとはわからないでいる息子でありますが、DO-IT Japanプログラムに参加して、ようやく何がわからないのかということに向き合うようになったようです。

この出会いをきっかけに、息子が受ける指導や支援を息子が感じ、同じような特徴を持つ人へ後に伝えていければよいなあと思っています。

DO-ITは私が自分を知るスイッチになってくれました

大町 祐太朗

この夏のプログラムに参加して、自分のことが少しずつ分かるようになってきました。このプログラムに参加する前、支援のことも親に頼りっぱなしだった私は、自分の障害についてあまり深く理解せずに生活してきました。自分が発達障害者だとは分かっていましたが、今のところ具体的には何障害なのか、実はDO-IT参加申込書を書くまで知りませんでした。夏のプログラム中、自分の障害について自分で説明しなくてはいけない機会がありましたが、こんな私ゆえ、うまく説明することができませんでした。みんなはちゃんと、しかもだいぶすらすらと説明出来ているのに、自分だけは上手く説明できない…。このようにくやしく、恥ずかしく思い、そして仲間への憧れを持ち、仙台に帰ってからは、webで自分の障害について検索したり、過去に親や学校等が支援計画や支援依頼に使った文書を読ませてもらったりしながら、自分に目を向けるように、ほんの少しずつではありますがなってきました。夏のプログラムが、自分を見つめ始めるスイッチになってくれたと思っています。

また、夏のプログラム中にも、自分を知る(場合によっては、改めて)ということ自体をすることが出来ました。例えば、プログラム中の何げない会話等において、自分は思ったことを言葉に変換するのに結構時間がかかるということを再確認したり、ちょっとしたことでもとっさの判断・行動を迫られたりすると思考停止のような状態になることが結構あることに気づいたり、などです。このようなこともあり、5日間のプログラム中でも、ほんの少しずつ、自分の障害や特徴について説明できるようにはなってきました。このように、DO-ITは私が自分を知るスイッチになってくれました。障害に加えうつ状態とも闘いながらのためなかなか上手く行かないことも多いのですが、上記の通り自分について知る資料を読んでみたり、発達障害専門の教授にアポイント取ってお話を伺いに行ったりするようにもなりました。障害者として自立する1歩目としての、自分を知るスイッチ…これが私の最初のDO-IT夏のプログラムの、一番の印象です。

障害者としての誇りだけでなく、自分自身の誇りも持てるようになりました。

加藤 あすみ

DO-ITに参加する一年前まで、私は他の障害者と同じように普通に生きているつもりでいました。だけど、生まれつき重い手足の障害を持つ友達に「あすみは歩けるから私よりマシ」「あすみの障害が羨ましい」と言われてから勝手に傷つき、他の障害を持つ友人達もそう思っているのではないか、と勝手に思い込むようになっていました。自身も障害者のくせに、静岡の街中で車椅子を見かけるたびに、なんとなく目が合わないようにと目を伏せることが度々ありました。初めて私は自分が障害者であることに嫌悪を覚えました。

この夏DO-ITに参加するときも、心底不安でした。私は車椅子に乗っている、だけど歩けるということで誰かに何かを思われているのではないかと、DO-IT期間中ずっと思っていました。だから、交流会でも以前の私なら率先して輪に入っていくことができましたが、この時ばかりは喉を痛めて声が出なくなってしまったこともあり、どうしても輪の中に入っていくことが出来ず、母と少し衝突していたこともあり、その場にいることが苦痛になってしまいました。

だけど最後に、メーリスやMSNを通じ、自分に誇りが持てるようになりました。障害者としての誇りだけでなく、自分自身の誇りも持てるようになりました。

DO-ITはスカラー同士の障害が異なるからこそ、今まで誰にも話せなかったことも自然と言い出せる。スカラー同士で手を伸ばし合える、ということがこのプログラムのモットーなのかもしれません。

～家族から～

加藤 政代

楽天的で行動派、人付き合いの下手な高次脳機能障害の長女。障害を抱え悩める同年代の仲間との交流の中で、行く末にある山を実感して欲しいとの思いで薦めたDO-IT。プログラム終了後の笑顔に、障害を客観的に見つめる機会を持ったかどうかは解りませんが、困った時に相談し、互いの喜びも共有することのできる、「真友」に巡り会えたことは明らかでした。

ネットでのやりとりを進める中で、だんだんと私の知らない娘が増えていき、私の中の娘を独り県外に出すことへの心配も小さくなってきています。

～家族から～

小林 聖子

DO-IT Japanとの出会い―それは息子が盲学校高等部普通科へ入学し、数ヶ月経った頃でした。大学進学を希望する息子に担任の先生から「大学体験が出来るプログラムがある」事を教えて頂きました。でもその頃は生まれて初めて親元を離れての寄宿舎生活に慣れるのに精一杯だったので心のゆとりがなく、真剣に考えはじめたのは2年生になってからでした。大学進学か理療科進学で揺れ動いていました。「大学体験ができる」「障害の理解」「自ら考え判断する」「コミュニケーションの技法が学べる」、これら全てが今の息子にとって必要な大切なものだと感じ、応募を勧めました。

5日間のセミナーの3日目の自由行動で「秋葉原行き」を目的にしていた息子は、仲間たちと協力しながら実現する事ができ、彼の中での大きな成果と自信になり、その後の東京方面の修学旅行で大いに経験を生かす事ができました。

このプログラムに参加させて頂いて、親子共々、自立に向けての第一歩を踏み出す事ができました。

09スカラーの仲間たち、先輩スカラーの方達との関わりやスタッフの皆さんのサポートによって貴重な体験と思い出ができたことに感謝いたします。

本当に有りがとうございました。

大学体験プログラムは、一言で言うとすごく忙しかったです。スケジュールがみっちり組んであるので、息をつくひまもなく、ばたばたとしたというのが印象に残っています。

このプログラムは、私にとって初めてのことばかりでした。1時間にわたる講義に迷路みたいに広くて複雑な校舎の移動、高級なホテルでの宿泊、別の障害を持った同世代の人や大学の教授や准教授との対面、Microsoft社の見学など言い出すときりがありません。これだけ多くの初体験をして、感動と共に不安も生まれました。中でも一番感動したことは、Microsoft社を訪問した時にまだ未発売のWindows 7の紹介をしてくださったことです。特に、自分が前に操作したのをそっくりそのまま記憶する機能には、驚きました。パソコンでトラブルが起きた時に、私では説明できないことがよくあるのでこの機能があればトラブル解消の大きな役割を果たしてくれます。次に不安を抱いたことは、大学生活を続けられるかということです。このプログラムは5日間という短い、限定された時間だから乗り切れましたが、それを続けるとなるとやっていけないと感じました。

また、今回の私の反省点は積極性が足りなかったことと、時間が守れなかったことです。積極性が足りなかったと思う場面は、せっかく話す時間を与えてくれるのに自分からなかなか行動できなかったことです。この2つは、今後直していきたいと思います。

今後の抱負ですが、まだ進路が定まってないので進路を決定することと、不安を少しずつ自信に変えていくことです。

最後に、自由時間に行った秋葉原が楽しかったです。

このプログラムは、私にとって初めてのことばかりでした。

小林 聖人

自分の障害の特性にあった別の生き方もあるんだということを自覚できる機会にもなりました

鈴木 岳志

4年程前にアスペルガー症候群と診断されたことがきっかけで、発達障害支援センターのスタッフから支援を受けてきましたが、DO-ITはその支援のひとつとして、両親がスタッフから得た情報でした。

僕は中学時代に不登校となって以来、学校へ行けませんでしたが、科学や世の中のしくみなどに関する好奇心はあり、できれば大学へ行って勉強をしたいという気持ちは持ちつづけていました。そのために大検を受けて合格したのですが、その後に受けたセンター試験では思うような点数が取れず、結局大学受験は断念しました。大検と違って、ふるい落とすための試験である大学入試は、想像以上に難しいものでした。受験のために必要な多くの教科を勉強するためには、塾などでの指導のもとに自分の意志で勉強しつづける力が必要なのでしょうが、自分にはなかなか継続する根気が沸いてこないのです。

そのような折、DO-ITへの参加のチャンスを得ることができました。

自宅にこもりがちだった自分にとって、両親が近くにいない環境で、障害を持つひとたちと過ごした5日間は、僕にとってひとつの大きな刺激になりました。しかし同時に、様々な講演や企業訪問、障害を持つひとたちの話などなど、今まで主にテレビやインターネットのバーチャルな空間が相手だった自分にとって、実際のひとを前にするという経験は緊張の連続でもありました。僕の障害のなかでも、もっとも自分を苦しめるのは、自閉性障害の特徴であるコミュニケーション能力の問題です。今回DO-ITに参加させてもらっても、やはり今まで感じてきたような疎外感はなかなか払拭できなかったというのが率直な感想です。本来、DO-ITの目的は、障害者が大学生活を送るために必要な措置等を障害者自身が社会に訴えていくことにありますが、自閉症スペクトラムのひとにとって、いかに「自分の困った感」を表現することが難しいことかを改めて思い知るとともに、大学進学は今でも夢ですが、あまりそれに固執することなく、自分の障害の特性にあった別の生き方もあるんだということを自覚できる機会にもなりました。ありがとうございました。

～家族から～

鈴木 廣信

DO-IT Japan 2009への参加にあたっては、近藤先生をはじめ多くのスタッフの皆様にお世話になりまして本当に感謝申し上げます。

生まれたときから何かほかの子とは違う息子の育てにくさの原因が、アスペルガー症候群（自閉性障害）にあることがわかったのが、２００５年でした。難しいことは理解できるのに、ごく単純な生活周辺のことがわからないという特性に、息子はこれまで人知れず苦労が多かったことと思います。自閉性障害には、「想像力が育ちにくい」、「社会性が乏しい」、「会話がすれ違う」という3つの行動の特徴があり、息子もまさにこの3つを併せ持っています。さらに、具体的な問題としては、「実行機能の障害」があります。頭の中ではいろいろと考えるんですが、その結果がなかなか出力（実行）されません。

今回の大学体験プログラムでは、障害を持った仲間のひとたちとのふれあいの中で、それなりのことは学んできてくれたことと期待していますが、様々な障害の中でも、特に息子のような自閉性障害者にとって、このプログラムへの参加は、かなりハードルが高かったのではないかと思っています。歩くこともしゃべることも聞くことも書くこともできる能力を持っているはずなのに、それを行動に移すことができるようになるまでに大変な時間がかかるのです。また、仲間のひとたちとの間でも、不適切な行動や会話があったのではないかと心配もしています。

この大学体験プログラムは、今までに日本になかった障害者を対象とした画期的なトライアルとして、ぜひ発展していってもらえることを期待します。そんな中で、自閉性障害を持つひとたちへのアプローチの仕方は特に難しい面をもっていると思いますが、このプログラムがそのようなひとたちにも効果的に機能するように今後も様々な意見を発信させていただきたいと思います。

自分とは違う障害を持つ人の意見を聞くことで他の障害への理解を深められたと思います

西内 貴紗

DO-ITに参加して様々な障害を持っている人たちと関わりを持って改めて障害について考えることが出来ました。また、自分とは違う障害を持つ人の意見を聞くことで他の障害への理解を深められたと思います。新しく挑戦出来たこともたくさんありました。以前、「手動車椅子で移動できるから電動車椅子なんて必要ない」と思っていた私が駒場キャンパスで大学の広さを思い知り初めて電動車椅子に乗りました。乗ってみると快適で疲れることが無かったため「一台あるといいな」と思うようになりました。さらに長期ホテル滞在においての私の一番の問題はお風呂でした。お風呂介助してもらったことがない私はもう嫌で仕方ありませんでした。それに初対面の人に頼むのは恥ずかしく腰が引けました。でも勇気を出して頼みました。初めはやっぱり恥ずかしかったですが段々なれてきて最終日には変に気をつかうことなく頼むことが出来るようになりました。殻を破れてよかったと思います。私はDO-ITで本当に大学進学したいと再確認できました。そのほかにも、かけがえのない人たちとの繋がり、挑戦する勇気を得ることが出来たと思います。これからも、このプログラムの一員として誇りを持ち、DO-ITの仲間たち、先生方との繋がりを大切にしていきたいです。

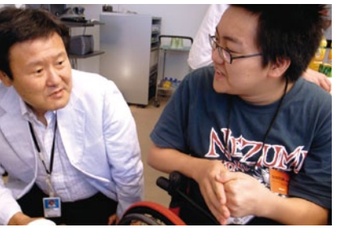
～家族から～

西内 裕香

DO-IT Japanを知ったのは子どもを通じてですが、話を聞いた時は想像もつかないし半信半疑でした。今まで子供（脳性麻痺、手動車イス使用）にはやりたい事をやらせたい、出来る事はさせたい主義で育てて来ましたので、参加する事に即賛同しました。保育所、小中学校の義務教育課程では地域の普通学校に通わせた事で人とのコミュニケーションも上手く取れる子供に成長しましたが思春期にさしかかり障害を持っている事に悲観悲痛も多々あったと思います。そんな時期にDO-IT Japanに出会え、大学進学も考えていたので参加した事で今後の自信に繋がったと思います。全国の様々な障害を持つ方に出会える事が出来、子供の世界も大きく広がりました。来年も参加したいと意欲満々です。中邑教授、福島教授に出会えて親子共々新たな気持ちが芽生え、今後前向きによりいっそう前向きに生きて行く力が沸きました。本当にありがとうございました。

多くの面で私は考え方が甘いことも知りました

寺島 正樹



今回のDO-IT　Japanプログラムに参加して、私と違う障害をもつ友達の事や、実際に大学へ通うようになった時の生活のこと等、先輩の意見から多くのことを学びました。

私は小学校から身体障害の特別支援学校に通っていて、同世代の多くのさまざまな障害を持つ人と話す機会があまりありませんでした。それで、自分自身知らないうちに、ほかの障害を持つ人と自分は、具体的にはわかりませんが、どこかで何かが違うと思っていました。このプログラムに参加したことで、自分とはことなる障害を持つ人たちと、将来のこと等同じ目線で話すことが出来ました。その中で、大学への思いや趣味、勉強についてなど共感できることや自分と同じだと思うことがたくさんありました。コミュニケーションをとる時もさまざまな方法があり最初は戸惑いましたが、なれて楽しくなりました。話をしている中で、自分とは違う障害による悩みを知ることが出来たことも、良かったです。障害は違っても変わらないということを学ぶことが出来ました。

また、多くの面で私は考え方が甘いことも知りました。初めて東京の多くの人の中で改札を探したり、電車に乗ったりすることも、なんとかなる気がしていました。しかし、実際やってみると右も左もわからないという感じで電車がどこにあるのか、どの切符を買えばいいのか等の困難にぶつかりました。その度に自分で解決策を考えたり、時には仲間と相談したりしました。集合時間に遅れてしまうこともありましたが、とても良い経験になりました。自分で移動できた事が自信になりました。

このプログラムでの一番の思い出は、やはり多くの友達ができた事です。ほかにも将来の生活のことや大学のことなど多くのことを学ぶことが出来ました。本当にDO-IT japanプログラムに参加できてよかったと思います。有難うございました。

～家族から～

寺島 幸美

正樹は、精神的に少し弱い所があり頼まれると断れないところがあります。ネガティブな自分といつも葛藤しているように思います。しかしスカラーとの交流や大学の授業や企業への訪問を通して正樹の心の中で何かが変わったように思います。クラスのリーダーシップをとったり学園祭にはエレキギターに挑戦したりして頑張っています。DO-IT　Japanに参加させていただき本当に有難うございました。

お互い今までの自分の経験では想像もつかないような各々の抱える困難を、はっきりと見て、話して、考える

溝井 英二朗

～家族から～

溝井 敏幸

今回参加させて頂きました長男・英二朗は、LDとADHDを併せ持ち、特に小学校生活の中で困難さを抱えて来た中で、私達が周囲に理解を求めて行ったことと、告知を受けてからの本人の頑張りから、色々な失敗がありましたが、元気に高校2年生となりました。

周囲から色々な支援を頂いて来た中で、自分も将来、自分と同じ様な困難さを持ち苦労をしていることもを支援する様な仕事をしていきたいとの希望があると聞き、以前より存じ上げておりました中邑先生や坂井先生等のご指導を頂けることと、発達障害に限らず他の障害の方々と交流しながら共に学び経験出来る当プログラムに期待を持って参加させて頂きました。

親としては、我が子の障害にしか目が行かないものですが、今回色々な障害の同世代のポジティブに取り組む若者の姿を見て、真のノーマライゼーションは彼らが中心となり実現して行くのではないかと期待させてくれました

私は今まで自分と同じ発達障害の人としかあまり知り合う機会がありませんでした。例えば私がよく行く発達障害当事者の会などにいる方は、当たり前ですが発達障害を持った方がほとんどですし、私が時々講演会などで話をさせていただく時に集まってくださる方も発達障害関係の方がほとんどです。それゆえに今回のこのDO-IT　Japanで、発達障害以外の障害の当事者、しかもほぼ同年代の人々と話し合うことが出来たというのは、私にとって非常に大きな経験になりました。まったく違う障害を持っていても通じ合う部分があったり、はたまた予想もつかない事が困難だったり。もちろんそれは私自身も然りなのでしょうが、お互い今までの自分の経験では想像もつかないような各々の抱える困難を、はっきりと見て、話して、考えることで、これまでの自分にない新しい切り口での物事の見方というのが出来るようになったと思います。そしてその新しい切り口での見方というのを、このDO-IT Japanのプログラムは形として示してくれました。それは、2日目のマイクロソフト社訪問時にマイクロソフトの方が話してくださった、企業として取り組んでいる障害者支援の最前線や、近藤先生によって紹介されたパソコンに搭載されている障害を支援する様々な機能の数々でした。私は今まで長い間パソコンを使っていながら、ここまでパソコンにこれだけ様々な障害を支援する機能が搭載されているとはまったく知りませんでした。例えばディスプレイの色調を、背景を黒く、文字を白くというように調整できたり、拡大鏡を使って文字を大きくして、目が見えづらい人にも見やすくすることができること。そしてこれこそ実際にそのような困難がある人と話していなければ、話を聞いてもいまいち理解できなかった機能だと思います。今まで知らなかった切り口から物事を見てみることで、自分の世界だけでは理解出来なかったことが理解できる。そんな経験を私はこのDO-IT Japanですることが出来ました。

自分以外の障害者がどのように生活しているか、
どのようなことで困っているのか、
どのような工夫をしているのかなどを
知るといういい機会にもなったと思います

森 敦史

今回、DO-IT Japanに参加して、大学の授業などだけでなく、大学の生活を体験したり、大学の雰囲気を味わったりすることができてよかったなと思っています。特に、自分は視覚と聴覚に障害（このような障害を盲ろうともいう）を持っているため、手話・指文字や指点字（盲ろう者独自のコミュニケーション方法）による通訳などを必要としています。そこで、今回も、夜間を除き、ほぼすべての日程に通訳者を付けてもらいました。

大学の講義も初体験でした。内容が難しいだけでなく通訳もプロの人とはいえ、話すスピードが早いと追いつかなかったりしてしまうということを改めて感じさせられました。また、話し方が早いことや、内容が難しいことによって、自分が内容を理解しにくいということに改めて気づきました。今回の体験を参考に通訳方法の研究もかねて、今後どのように通訳を受けるか、どのように講義などの話しを聞けばよいのかということも考えたいなと思っています。

また、盲、聾以外の障害を持つ人ともかかわることができ、いろいろな話を聞いたり、交流したりすることができたので、自分以外の障害者がどのように生活しているか、どのようなことで困っているのか、どのような工夫をしているのかなどを知るといういい機会にもなったと思います。この経験を生かして、高校卒業後どのように生活したらいいのか、大学ではどのような勉強をしたらよいのかなどを具体的に考えて整理したいと思っています。

～家族から～

森 貞子

視覚と聴覚に障害を持って息子は生まれてきました。見えて聞こえていれば、生活の中で偶発的に学んでいくことができる人とのコミュニケーション方法や技能、日常生活の自立訓練など、ひとつひとつ丁寧に教えていく必要があり、時間もかかります。

また、人から伝えてもらわなければ情報が得られません。人が自分に触ってくれない限り、近くに人がいることさえわかりません。しかし、ITのおかげで、人を介さなくても自分から好きな時に好きなことを自由に情報が得られるようになり、コミュニケーション技能を持たない人たちとのコミュニケーションも可能になりました。

ですが、やっぱり、彼の人生の豊かさは出会った人の数と触れた手の暖かさだと思います。DO-ITへの参加は彼の世界の広がりの第一歩だったと思います。彼の世界の広がりを影ながらこれからも応援していきたいと思います。

2年目以降のプログラム 2009/7/30-8/2

―― 社会に向けてメッセージを発信できる人を目指して ――

2年目以降のDO-IT Japan

東京大学先端科学技術研究センター 特任助教　岡 耕平

DO-IT Japanは今回で3年目となった。毎年10名前後の新しいスカラーが加わり、今年度、スカラーは総勢31名となった。回を重ねる毎に、メディア等を通じて少しずつDO-ITを知る人も増えてきた。しかしながら、そこで取り上げられるものは、もともと「大学体験プログラム」として開始された、1年次スカラーを対象にした5日間の親元を離れた活動プログラムがほとんどである。DO-IT Japanが描くビジョンでは、我々とともに障害のある当事者のなかから社会に向けてメッセージを発信できるような、次世代を担う人材を育成することを目指している。当然そのような人材の育成には時間がかかる。このようなことを踏まえ、DO-ITでは2年目以降のスカラー（2年次スカラーおよび3年次スカラー）、そして既に大学に入学したスカラー（大学生スカラー）に対しても、プログラムを用意している。

今回、2年次スカラーは1日かけてマガジンハウス、資生堂、ソフトバンクモバイルを訪問させていただき、夜には京王プラザホテルでフレンチのディナーを食べた。このことが一体どのような意味を持つのか、と思われるかもしれない。この狙いとして、それぞれの企業で、プロの仕事意識について、自己表現の重要性について、コミュニケーションについて、公の場での振る舞い方について学ぶ、ということが背景にあった。自立して自ら社会に対して発信できる人材は、単純に講義を受講することで育つというものではない。様々な社会経験が彼らを成長させるのである。また、大学生スカラーは、富士通netCommunityでのプレゼンテーション、Living Liblary（生きている図書館）で、自身について他者に語るという機会を得た。彼らが、この様な経験を通じて、何をどのように学び、感じたのかを後の感想文から見ていただきたい。きっとそこには、彼らの成長の跡が見られることだろう。少しずつの歩みではあるが、彼らとともにDO-IT Japanも成長してゆきたいと思う。

資生堂
自己表現を学ぶ

中野 まこ（筋ジストロフィー／08年度スカラー）

DO-IT2年目の夏は、私1人での上京から始まった。昨年は母と2人で上京したが、「1人で行ってみたら。」と母の一言に押されて、自立への一歩を踏み出すことができた。出発当日まで本当に1人で行けるのかと不安だった。しかし車椅子の私が新幹線で東京に行けた。これは私にとって大きな強み、自信となった。行動範囲が広がり、挑戦するチャンスを自分で得ることができるようになった。これが私にとっての大きな成長である。

今回のプログラムでは、企業訪問を通して「社会との接し方」を学ぶことができた。企業訪問で私はあいさつをするという役目があった。しかしその場の対応ができずプレッシャーに潰れ、役目を果たすことができなかった。これから大学生になり社会に出ていくと、責任を持たなければならないし、臨機応変に対応できる力を求められると思う。普段の生活では経験できない社会の厳しさを、DO-ITで学ぶことができた。これからも様々な人と積極的に関わり、コミュニケーション力や臨機応変に対応する力を身につけていきたい。

先日、第1志望の大学に合格し、これからの大学生活が一段と楽しみになった。私は1人暮らしをしたいと思っている。今回のプログラムの中に「1人で暮らす」というセッションがあり、とても参考になった。実際に1人暮らしをしている先輩の話を伺い、先生方からアドバイスを頂くことができた。これからもメーリングリストやブログを積極的に利用して、1人暮らしに向けて情報収集を行っていきたい。そして大学では、子どもの発達や心理を学び、将来は子どもとその親と向き合う仕事をしたいと思っている。企業訪問を通して感じた「情熱」を持ち、DO-ITで得た自信と私の可能性を信じて夢に向かって頑張っていきたい。

マガジンハウス
表現のプロの仕事意識を学ぶ

関根 彩香（頸椎損傷／08年度スカラー）

2年目のDO-ITに参加するにあたって私は、企業や社会、スカラーとの接し方を学びたいという目標を立てました。これは事前に訪問する企業やDO-ITのスタッフさんとの連絡の際の反省と、昨年スカラーの皆とあまり話したり情報交換をしたりする事が出来なかったことから、今年は自分から積極的に話しかける様にしようと思い目標に設定しました。

初日に昨年と今年で自分の変わったところは?という質問に何も答えられずにいましたが、3日間を通して考え、企業訪問への事前連絡で苦手な電話担当になりとても緊張したもののきちんと対応する事が出来た事や、スカラーの皆とも昨年より沢山話すことが出来きた事で少しは目標も達成出来たかなと思います。また、ボラさんを自分で見つけられ3日間過ごす事が出来たことは昨年より少し進歩が出来た部分かなと思っています。

一方で成長したスカラーの皆を見て、自分の甘さに気づかされる毎日でもありました。その中で課題も多く見つかったので、今回の経験を今後の生活に生かして来年、成長したと言える様にこの1年努力したいと思っています。

今回3社を訪問して、多くの人の想いや考えが雑誌や携帯という一つのものになる現場を訪問する事が出来、どの企業でも誇りを持ち生き生きと輝いて仕事をしている姿を見てとても刺激を受けました。私も社会人になる時には、そんな誇りを持って仕事が出来る人になれる様に頑張りたいと思います。

また、初メイクをして頂き見た目も心も綺麗になり自信を持つことが出来ました。メイクというのは、前向きな気持ちになれるとても良いきっかけだなと思いました。私は大学で心理学を学びたいと思っていて、メイクで自信が持てる様に、ちょっとしたきっかけで人は変わっていけると思っています。そのきっかけを悩みの解決につなげていけるような心理士になりたいと思います。

今年もとても貴重な体験をする事が出来て感謝しています。ありがとうございました。

ソフトバンクモバイル
コミュニケーションについて学ぶ

市川 樹（発達障害／08年度スカラー）

私は今年のDO-IT Japanのプログラムの中で、一人の人間として社会で生きていくという事はどういう事なのか、という事を考えました。まず、今年のプログラムでは企業訪問を行いました。3つの企業を回りましたが、その中で色々な事を学びました。企業で働く人々は、その仕事に対してどんな姿勢で向き合っているのか、企業の提供する商品やサービスが私達の元に届くまでにはどのような経緯があるのか、そしてそれらの商品やサービスは私たちの暮らしている社会にどのような影響を与えるのか、ということを知ることが出来ました。また、ホテルでのディナーのために、周りの雰囲気を崩さないような服を、両親と協力して事前に用意することもしました。どちらも、私にとっては始めての経験でした。

今回のDO-IT Japanのプログラムに参加してわかった事は、自分の夢や目標を追っていく事も大事だけれど、それと同時に自分を取り巻く社会との、自分なりの付き合い方を考えていかなくてはならない、という事です。結局人は一人では生きていけないのだから、どのように他の人に協力を求めるか、そして自分が他の人のために出来る事は何なのか、という事を考えることが大切だと思いました。

私は、「発達障害を持つ人々のために、コミュニケーションの助けになるソフトウェアを開発する」という目標を持っています。そして、その目標を実現するための手段として、今、大学への進学を目指しています。大学に進学したら、今後のDO-IT Japanのプログラムなどを通じてより見聞を広めて、自分の目標とするソフトウェアを、少しずつ形にしていきたいと思います。

京王プラザホテル　アンブローシア
社会での振る舞い方について学ぶ

新たなスカラーのメンバーと多くの交流がもてた事も貴重な経験となったと同時に、励みにもなりました。そこでは、自分とは異なる困難を抱えた人と出会えたことで、皆がどういう事で苦労し、どうしたらその困難を緩和できるかなど、普段ではなかなか気付かないことなども話し合う事ができ有意義な時間を送ることができました。

北田 翔吾（骨形成不全／08年度スカラー）

DO－IT期間中、私はずっと「なぜ自分という存在がこの世界にいるのだろう。本当にいていいのか。」と考えていました。悩んでいる私を自分のことのように心配してくれる仲間と3日間過ごし、DO－ITの最終日にはなんとなくわかったような気がしたけれど、またわからなくなってしまいました。みんな本当にごめんなさい。大学に行ったら変われるかな。しっかり自分の足で自分の人生を歩ける日は来るのかな。私は幼い。自分のことを大切にしてくれる仲間に素直に「ありがとう」が言えない。

川端 舞（脳性マヒ／08年度スカラー）

一人で暮らすということについて、同じ肢体不自由の仲間と話をすることで、やはり自分と同じようにヘルパーの確保などに苦労していることがわかりましたし、勉強と日常生活を両立させることの難しさもわかりました。その中で自分が今何を優先させるべきかという課題も見えてきました。日常生活に追われることで自分のやりたいことが出来なくなってしまっては本末転倒だからです。また、将来的には制度的な面も含めてこの現状を改善していく必要があると感じました。これらの2年次スカラーとしての経験から、ただ自分のためだけではではなく、障害を持った仲間や社会のために自分は何が出来るかということをふまえながら自分の将来について考えていきたいと思っています。

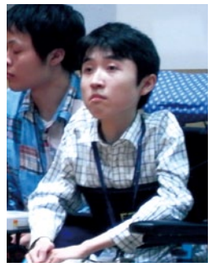
木下 昌（頸椎損傷／08年度スカラー）

3社の企業訪問を経験し共通するところで、言葉の力の大きさに気付くことができ、自分の意識にもこの考えを取り入れなければと感じる言葉が多々ありました。私自身も結局自分は何がしたいのだろうと問い続け、自分にもできるやりたい事を見つけ出せるような日々を過ごせるよう意識しています。現在の自分には不可能だとしても、常に何事に対しても「やればできる」という考えで、一歩でも前進できるような意識を持ち続けられるようになりつつあります。

小倉 信治（高次脳機能障害／08年度スカラー）

國光 良（筋ジストロフィー／07年度スカラー）

大学生スカラーとして参加したDO-IT　Japan2009プログラムで、私は、障がいを通して経験したことなどを相手に伝え、特にコミュニケーションの場において、サポートして下さっている企業なども含めた他者とのつながりを意識するということを目標にしましたが、今回は、それらの目標以上に、より多くのことを学んだ機会になったのではないかと思っています。
まず、富士通netCommunityへの訪問やリビングライブラリーでは、短い時間の発表の中で、伝えたいことをすべて発表するのは、難しかったのですが、自分自身の考えを自分の言葉で表現して伝えるということは、大変貴重な経験となりました。
自分にとっては当たり前となっている主観的な体験(自分の障がいを通しての経験から学んだり、考えたりしたこと)を他者に伝えるという場面において、自分自身の障がいと向き合った上で、実体験に基づいてしっかりと伝えようとしたときに、初めて、他者は自分の主観的な体験を、抽象的で捉えにくいものではなく、リアリティのあるものとして感じとることができるということを実感しました。普段、忙しい毎日の中では、自分にとっては当たり前となっていることを他者に伝えようとすることに煩わしさを覚えることもありますが、その当たり前となっていることを他者に伝えようとする努力で、他者との相互理解やつながりを意識することが可能になるのではないかと強く思いました。自分も他者もお互い100%の理解というものはないかもしれませんが、その努力によって、少しでも他者との距離を縮め、お互いの理解の度合いを増すことができればと思っています。



リビングライブラリーでは、私の病気や障害がわかる前と障害がわかってからの気持ちの変化というタイトルでお話をさせて頂きました。
改めて障害がわかる前の自分が周囲の友達と何か違っているように漠然と感じていた当時を思い出し、過去と現在の自分との気持ちの変わり方にスポットを当てることができました。
このことは、私自身にとっても日常生活を送る中でなかなか考えることがなかったことなので、とても貴重な時間となりました。

守屋 雄一郎（高次脳機能障害／大学生スカラー）

これから様々な問題に関わる上で思考し主張するスタイルを深め広げるための技術を学んで、実践することができたように思う。
特に「富士通 netCommunity」における発表に至るまでに仲間たちと意見を交換して内容をまとめた経験は有意義で、互いの構想したテーマの中により多くの視点を見つけることができたように思う。
また実際の発表の場面では、ある主張を大勢の前で伝達することの難しさを改めて実感させられた。

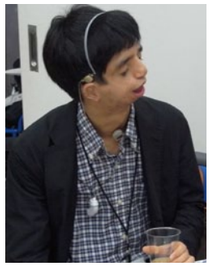
小林 春彦（高次脳機能障害／07年度スカラー）

蔵本 沙希（四肢欠損／08年度スカラー）

私の考えていた「大学生になる」ということは、自分で道を選んで勉強できる、高校生の時より自由が得られるという漠然とした考えだけでした。それだけに今回富士通社でのプレゼンテーションをする機会が与えられた事は私にとって大きな経験でした。「自分の思いを相手に伝える。」このことがどんなに重要であり、周囲に対して責任をともなうか。今回プレゼンテーションを準備するにあたって大学生になると自分の一つ一つの行動、発する言葉に重みを持つことが求められると先生方から学びました。プレゼンテーションを通じてどこまで自分を示せたかわかりませんが、初めて自ら意識して発言することで単に人前で話すからだけでなく「責任」という緊張感をよい意味で感じながら話すことができました。私たち障害を持つ者は周囲の人に何が出来て何が難しいのか、どのような社会を望むのか、について伝えていかなければならないものがあります。障害からくるできること、できないことだけではなく、ひとりひとり視点が違うこと。そして大切なのはお互いの違いを認め合い分かり合おうとする心だという思いは、この秋からアメリカで大学生活を始めた今、より強い思いとなっています。新しい人との出会いを通して、今決して何かがすぐには変わることはなくても誰か理解を示そうとしてくれる人がいる限りそこに意味があると私は思わされました。「変わらない現実より、変われる自分を見る。変わる自分が現実を変える」この言葉が続けて私を支えています。

斉藤 のぞみ（脳性マヒ／07年度スカラー）

私の中で大学生スカラーとして参加したことで一番印象的だったのは、多くの人の立場を考えた臨機応変な判断の重要性です。どうすれば効率よく大勢で行動できるかなど考えさせられることがたくさんありました。冒頭で“私の中で”と書いたのは、私がそれに気付いたのが今であるだけで、多くの人の立場を考えた臨機応変の重要性はもともとあったからです。ただ私の場合は、大学生スカラーという役割が与えられて初めてそれにきちんと気づくことができたのだと思います。そうした判断の重要性は様々な場面で言われることですが、それをただの言葉でなく実体験をもってわかることができたのが何よりの収穫でした。もっともその重要性に気付いただけで立派に行動できるはずもなく2泊3日の中で多くの失敗をし、難しさを感じました。しかし、言われた課題をこなすだけでなく、自分から考えて一つではないその場に合った答えを見つけることの、自分が動くことで何かができるということの楽しさを存分に感じることができました。
また大勢の人で何かをしようとするとき考えるだけで終わることなく、それを発信できなければ意味がありませんでした。いけないと思っているだけでは、乱れた列は乱れっぱなしです。逆に、富士通さんでのプレゼンで感じた私たちの発表とスタッフの皆さんのアイディアがつながっていくときのワクワクする感じは何とも言えないものでした。発言にパワーがあるということを感じられた体験でした。そしてそのパワーを知って益々、自分の判断の重要さに――その場の臨機応変なものであれ、長期的なビジョンであれ――気付かされました。



大勢の企業の方の前でプレゼンテーションは大きな自信と経験を私に与えてくれました。
富士通の岩崎部長から、
「お互いを理解することから始めようと思った。」
というお言葉をいただき、
富士通と私たちDO-ITスカラーが一緒になって、
障害があってもみんなと共に過ごせる社会を
作っていけたら素晴らしいと感じました。

豊田 陽平（聴覚障害／07年度スカラー）

障害のある学生本人、そして親や教師など周囲の人々は、大学受験から進学までの間に何を経験し、どのような思いを持つのでしょうか。障害学生の受験と進学を取り巻く状況について、当事者から見た実像は蓄積されておらず、あまりにも世の中に知られていません。そこで2009年8月1日、障害のある大学進学希望者とその周囲の人々を対象に、大学受験から進学までの現状を共有することを目的とした公開シンポジウムを行いました。

シンポジウム前半　大学進学後の障害学生支援での、先進的な取り組みを知る

同志社大学 学生支援機構 学生支援センター・長澤慶幸 氏（現職・国際連携推進機構日本語・日本文化教育センター）

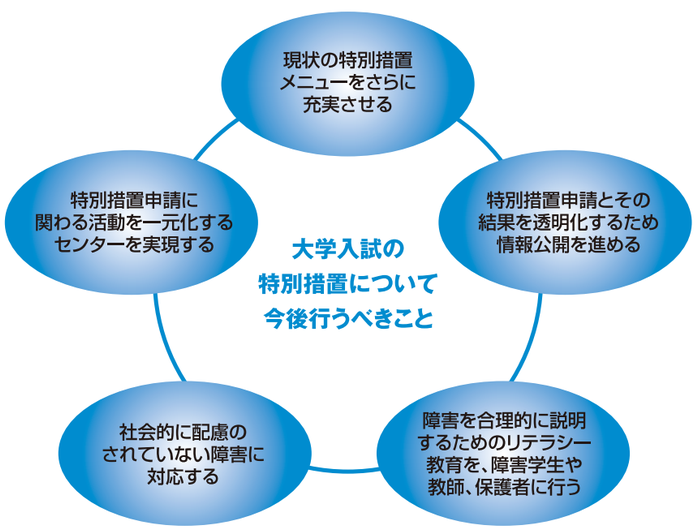
- 全学の支援窓口をすべて「障がい学生支援室」に一元化。学生が有償でスタッフとして障害学生に支援を提供する独自の制度を実施している。
- 手話・PC通訳、代読や点訳などの情報保障に加え、移動や食事、トイレなどの介助も実施し、全学生2万6千人のうち、現在86名の障害学生が同志社大学で学んでいる。

富山大学 学生支援センター トータルコミュニケーション支援室・吉永崇史 特命准教授

- 富山大学の学生が参加する学内SNSの中に、発達障害のある学生もオンラインで支援スタッフに相談できる窓口を準備。
- 発達障害のある大学生が困難を感じる場面として友人関係、ゼミ、実習、就職活動など、社会的なコミュニケーション場面がある。本人と支援者、本人のまわりにいる教職員や友達などが納得のいく、合理性のある支援を目指している。

独立行政法人日本学生支援機構 学生生活部 特別支援課 荒木昌美 氏

- 全国の高等教育機関を対象とした障害学生数や就学支援体制、特別措置申請数を調査した実態調査の結果を公開。
- 高大連携の必要性。高校生のうちから必要な支援について考える機会を持ち、オープンキャンパス等で大学に働きかける機会を持って欲しい。



シンポジウム後半　DO-ITのスカラーが実際の受験経験を自分の言葉で語る

国光 良さん

- 筋ジストロフィによる筋力の低下から文字を書くことが困難なので、普段の勉強ではパソコンを使用。
- 自分でネット等で調べて大学入試の特別措置を知り、自分から高校の担任など周囲に働きかけ、準備をした。
- センター入試の数学では計算過程の筆記が必要なため、筆記時間を調べて400文字の筆記に40分以上かかることを説明し、本来の規定中にはない1.5倍の時間延長措置を希望したが認められなかった。二次試験では申請したすべての大学で1.5倍が認められた。
- 時間延長では休憩時間が削られ短くなる。トイレや食事、マッサージなど人より時間がかかるため延長を申請し認められた。

国光さんの経験から

特別措置は、学校や周囲が勝手に用意してくれるものでなく、自分にとって必要な配慮を周囲に説明しなければならないことです。また、規定をそのまま受け取るのではなく、自分にとって必要で、かつ合理的な配慮とは何かを考え、「こうしたら私も試験に参加できる」ときちんと相手に説明することが必要です。

斎藤のぞみさん

- 脳性 マヒによる体幹機能障害があり、普段は車いすを使って移動。
- 文字を書いたり、長い時間、姿勢を保持しておくことに困難。
- センター入試を合わせ8校の受験申請で、数学の1.3倍時間延長と、マッサージのため母親の別室待機が認められた。
- 措置申請手続きはすべて母親が行った。申請の時期は最後の模試の時期。もし自分でやっていたら、勉強に身が入らなかったと思う。

斎藤さんの経験から

特別措置の申請は、各大学の入試担当者と個別に交渉する必要があります。彼女の場合は、その交渉や申請は、すべて母親が行いました。しかし家庭の事情により、家族からの支援が得られにくい場合も考えられます。受験では障害学生が特別措置申請を行うことが大きな負担になることは、経験したことのない人の目には見えにくい部分です。大学での特別措置申請の形式を一元化する取り組みが必要と言えるでしょう。

小林春彦さん

- 18歳の時の脳卒中の後遺症で、左半身の軽度のマヒと、高次脳機能障害（注意を向けている空間の左半分を意識しにくくなる半側空間無視という症状）があるため、文字を読むことにも大きな困難がある。
- センター試験では高次脳機能障害の申請枠がなかったので、視覚障害の枠で申請しようとした。しかし、時間延長措置に視能率90%以上の欠損を対象とするという規定に高次脳機能障害は当てはまらない。説明して理解してもらおうと努力したが、結局許可は下りなかった。
- 文字を読むことがとても難しいので、普段はパソコンの読み上げソフトを使って、耳で聞いて文章を読んだり、勉強している。時間はかかるがそれだったら読める。もっと自分の能力を発揮できるような試験にしてほしいと思う。

小林さんの経験から

一般的によく知られていない障害は数多くあります。視覚障害では時間延長などの特別措置が許可されても、高次脳機能障害では認められない現状を「規則が整っていないのだから仕方ない」と本人が納得することなどできません。多様な障害が関わったときに、学生のどのような能力を評価するのかを深く考え、どこまでの配慮を合理的として認めるのか、大学など選抜を実施する側が問いかけられていると言える事例です。

守屋雄一郎さん

- 神経難病の多発性硬化症により、中枢神経の情報伝達がスムーズにいかないため、発話が流ちょうでなかったり、考えをまとめることや文字を読むことに時間がかかったりと、高次脳機能障害のような困難がある。
- ある大学の措置申請窓口が広報課だったので、そちらに連絡すると、担当者から「障害があるのに大学進学して、その後どうするんですか」と言われ、非常にショックを受けた。
- 入試の面接で「障害があるなら、他の大学を受験した方がいい」と言われた経験があり、特別措置を受けずに受験することにした。

守屋さんの経験から

障害学生支援の環境が整っている大学はまだ多くありません。また、障害支援の専門家が進学後の支援を行っている大学でも、入試の出願受付には関らない場合があります。そのために特別措置申請を受け付ける窓口から、守屋さんが受けたような発言が出ることはとても悲しいことです。入試の相談窓口段階から、障害学生支援の担当者が関わるシステムを作る必要があることがわかります。

豊田陽平さん

- 伝音声の聴覚障害と構音障害がある。知らない人の声や、普段と違う場所、不慣れな状況では特に聞きにくさを感じる。
- センター試験の英語のヒアリング免除を申請できる基準をクリアしているが、「ヒアリングの授業に参加しているなら免除はできない」と電話で担当者から聞いた。すでに授業を受けているので、学校の先生からの状況報告に嘘を書くわけにもいかず、免除措置申請を諦めた。

豊田さんの経験から

特別措置を申請しない決定をするには、本人や親、学校の先生も、深く悩んだことと思います。一般の高校に通う豊田君のような学生の場合、周囲や先輩に障害のある学生もおらず、教師も障害についてはわからないため、アドバイスを得られないという現状があります。申請の可否を考えるために、特別措置が許可された先行事例について、できるだけ詳しい情報公開がされる必要があります。

障害のある本人にとって、自分の障害とそこから来るニーズについて考え、理解し、それを相手に正しく伝える経験をすることは、その後の自立した人生を送る上で、とても重要なことです。大学入試は、それを経験する最初のきっかけとなるともいえます。特別措置のような配慮は、受けるものではなく、自分から説明して得ていく必要のあるものです。親や教師、周囲は、その自立の機会を奪わないように支えていく必要があると言えるでしょう。また本人にとっても、合理的配慮とは何かを正しく理解する必要があります。配慮とは、勉強する努力をしていないことを大目に見てもらうことではありません。支援があれば自分がそこに参加できることを、説明して示していくことだと言えます。

参考情報源

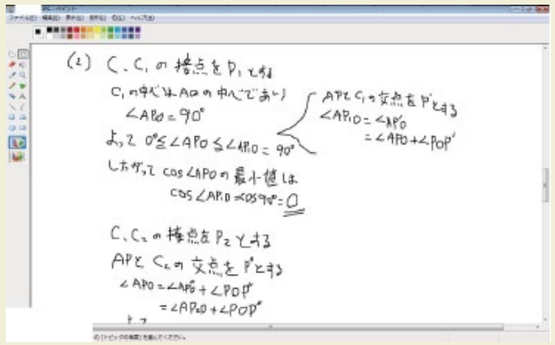
- 同志社大学 障害学生支援室　http://www.doshisha.ac.jp/students/support2/shogai/
- 富山大学 学生支援センター トータルコミュニケーション支援室　http://www3.u-toyama.ac.jp/gp07/communication.html
- 独立行政法人日本学生支援機構 障害学生就学支援情報　http://www.jasso.go.jp/tokubetsu_shien/
  → 様々な障害のある学生に、受験の経験を時間軸に沿って詳細にインタビューした調査結果を公開
  http://www.jasso.go.jp/tokubetsu_shien/ukeire.html　左記URLの「東京大学」の部分を参照してください。

テクノロジーがスカラーの活動範囲を拡げている。
実際の生活の中でテクノロジーはどのように活用されているのだろうか?

絵ではなく数式を描くアクセサリ「ペイント」

石前 翔平(筋ジストロフィー)

僕は、手での筆記が出来ないため、普段学校の授業でパソコンを使用し、スキャンした教科書を開いたり、ノートをとったりしているのですが、その中でも特に使っている機能として、Windowsに標準で付いているアクセサリの「ペイント」機能があります。
「ペイント」といえば、絵を描いたりするときに使われることが多いと思いますが、僕の場合は、手での筆記に代わる筆記手段として使っています。詳しく説明すると、トラックボールマウスを使用し、「ペイント」の画面上にクリックとドラッグ操作で文字を書いていくという方法です。ワープロソフトなどを使う際は、スクリーンキーボードでの入力で事足りますが、特に計算が必要な数学の授業では、白紙にメモをとるのと同じ感覚で計算が書けるので、非常に助かっています。
この機能を使い始めて最初の頃は、なかなか上手く文字を書くことが出来ず、思うように使えませんでしたが、何度も使っていくことで上達していき、若干時間はかかりますが、文字は手書きに比べてほとんど遜色なく書けるほどになりました。今のところは、自分にとってはこの方法が一番ではないかと思っています。



手書きもできるけど,やっぱり「Word」で楽に文章が書きたい

中野 まこ(筋ジストロフィー)

大学入試の際の志願理由書・レポートの作成、大学生活に向けての書類の作成、また必要な書類・文書の作成のときに、Wordを利用している。現在私は筆記が可能だが、長時間筆記を続けていると手・首・肩・が疲労してしまう。レポートや書類など文字数が多量であり、何度も書き直しが必要なので、どんなところでもキーボード1つで消せたり、挿入したりできるWordが大変役立っている。また、筆記よりキーボードで入力する方が早いと感じる。Wordを利用することによって、文書作成が楽に、そして簡単にできるようになるため、これからも積極的に利用していきたい。

意外と知られていない便利な「ユーザー補助機能」

関根 彩香(頸椎損傷)

私は手が利かないため、2つのキーを同時に押すことが出来なかったのですが、DO-ITに参加して固定キーのドラッグのやり方を教えて頂き、1人では難しかった作業が出来るようになりました。学校の課題でPower pointを利用する事が多いので、固定キーのドラッグを使って作成をしています。以前は、誰かに手伝ってもらわないと出来ず、作業時間が限られていましたが、今では自分1人で作業をする事が出来るので作業効率も良く、とても役に立っています。

「Japanist」があれば授業についていける

加藤 あすみ(高次脳機能障害)

私はJapanistという入力予測ソフトを使用しています。志望大学へ個別体験入学した際に、実際に講義の体験でJapanistを使いました。先生の話には繰り返しの言葉が多く、日常であればマッハのスピードで打ち、特に長い文を打ち出すのにはとても大変で苦労するかと感じましたが、それらの文を打ち出す際、数回のキータッチで文が出てくるのでとても楽でした。私のような障害者だけでなく、親兄弟などの健常者にも使いやすいと感じるそうです。

「Windows Live」が拡げるコミュニケーションの輪

吉田 佐保子(脳性マヒ)

Windows Liveを使っています。ブログの公開で自分の近況報告ができることも嬉しいですが、MSNメッセンジャーでのチャットが嬉しいです。ブログと違い、すぐに仲間やメンターの先生方からのコメントが返ってきますし,まとまっていない気持ちもそのまま書けるからです。テクノロジーの利用に対して,以前は独力できることにテクノロジーを使うことは怠けているようで抵抗がありましたが、現在ではそれが生活の質を上げ、仲間とのつながりを深いものにしてくれています。

「ICレコーダー」があるから先生の話に集中できる

國光 良(筋ジストロフィー)

ICレコーダーは、大学の講義の情報保障として使用しています。高校での授業と違い、大学では、先生は重要な箇所を板書よりも口頭で説明されます。そのため、握力が弱く、手指の関節が拘縮している僕にとって、先生の話されるスピードに合わせ、それをすべて筆記用具でメモするのは大変です。しかし、ICレコーダーがあると、講義の時には、メモをせずに先生の説明の方を集中して聞き、講義が終わってからは、復習として講義内容を聞き返して、そのときにゆっくりとメモできるので、重要な箇所を欠かさずに、自分のペースで勉強できます。また、ICレコーダーを直接、パソコンのUSBポートに接続することもできるので、講義の音声データをパソコンに取り込み、聞く時は、windows media playerで聞いています。重要な箇所をメモするたびに、ICレコーダーの再生/一時停止、巻戻し/早送りボタンなどを押すことも大変ですが、パソコンに取り込むと、マウス一つで操作できるため、とても便利です。

注意のコントロールの困難を「ICレコーダー」で支援する

守屋 雄一郎(高次脳機能障害)

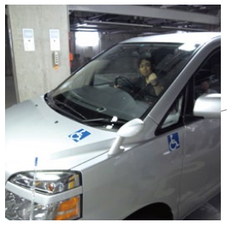
大学の講義で、OLYMPUS Voice-Trek V-51を使用しています。授業内でレポートを提出しなければならない時、私自身はレポートを作成することだけに注意が向いてしまうために、先生が説明している内容に耳を傾けることが難しい状況にあります。高次脳機能障害のため、同時に2つ以上のことをやりこなすことが困難なのです。そこで、ICレコーダーを使用し録音することにより、家で繰り返し聞き直すことにより復習の意味でも大変役立っています。定期試験前に再度聞き直すことにより、声の抑揚からどのような点を先生が強調して説明していたのかが分かり、試験勉強もはかどります。

意外なところで自立を支える「ケータイ」

関根 彩香(頸椎損傷)

私は1日に何回かジョクソウの傷の確認が必要なのですが、背中なので自分で見ることができません。そのため,携帯電話で写真を撮ってもらい確認するようにしています。以前は、口頭で教えてもらっていたのですが、人によってニュアンスが違って困っていました。そこで思いついたのが、いつでも持ち歩いている携帯電話でした。これは親が頼りの生活からの自立への一歩だと思い始めました。

Support



協　力

FUJITSU

協　力

SoftBank

協　力

株式会社マガジンハウス

協　力

SHISEIDO

協　力

株式会社トヨタレンタリース東京

主　催

D-IT Japan

東京大学先端科学技術
研究センター

運営 協力

石川県立養護学校　愛媛大学　香川大学
専修大学　筑波 大学　日本大学
日本社会事業大学　日本福祉大学
ルーテル学院大学　早稲田大学
（五十音順）

後　援

厚生労働省　文部科学省

共　催

Microsoft

協　力

OKI Open up your dreams

協　力

OLYMPUS

協　力

KEIO PLAZA HOTEL

協　力

ケージーエス株式会社